

報告番号 甲 乙 第 号

秋保 亘君 博士学位請求論文 審査報告

論文題目：本質と実在—スピノザ形而上学の生成とその展開—

論文審査担当者

主査 慶應義塾大学文学部教授
同大学院文学研究科委員 斎藤慶典
副査 慶應義塾大学文学部教授
同大学院文学研究科委員 山内志朗
副査 東京大学大学院
人文社会系研究科准教授 鈴木泉

秋保亘君の博士学位請求論文は、17世紀オランダの哲学者スピノザ (Baruch de Spinoza, 1632-1677) の哲学を生成史的観点から研究し、スピノザ形而上学の成立と展開を、「本質」ならびに「実在」の概念を分析の中心に据えることで描き出そうとする意欲的な試みである。スピノザ哲学に関する先行研究はすでに国内外に多数存在するが、本論文はこうした諸研究に十分に目を配った上で、「生」についての倫理・哲学的探求こそがスピノザ哲学の一貫したモチーフである点を明らかにしている。とりわけスピノザの主著『エチカ』で示される形而上学を、原因性をめぐる議論の体系的な分析によって再構成し、現実において与えられている以外の生がありえないことを原因の必然性から論証する「生の肯定の哲学」として読み解いた点は、17世紀哲学研究にとどまらず、広く哲学・倫理学研究一般に議論を提供するものとなっており、高い学術的価値を有する。

論文の構成

本論文は序論と、終章を含めた5つの章、結論から構成されている。その全体の課題は、『エチカ』で展開される形而上学の狙いが、いま・この現実において生きる私たちの生の肯定にあるという点を示すことである。本論文は大きく前半部(1～2章、3章の前半)と後半部(3章の後半以降)に分かれる。前半部は『エチカ』の形而上学が答えようとしたこの課題へ向けての歩みを形作る諸論点を抽出すべく、スピノザの初期著作である『知性改善論』を分析する。後半部は『エチカ』の分析にあてられ、いかにしてこの課題が実現されるのかを示す。本論文の具体的な構成は以下の通りである。

序論

第1章：スピノザ形而上学の開始点：確実性の問題

- 1) 学の目的—スピノザ哲学のもくろみ—
- 2) 確実性の問題

2-1) 確実性—対象的本質

2-2) 確実性にかんする齟齬：『改善論』テキストの多層性

第2章：スピノザ形而上学の生成：実在と本質

1) 『改善論』における実在と本質の問題：個別性

1-1) 実在の個別性

1-2) 個別的本質と個別の実在

2) 個別的なものの本質と実在：実在の多義性・本質の優位・自然の順序

2-1) 実在の多義性

2-2) 本質の優位

2-3) 自然の順序

3) 『改善論』の定義論(1)：定義論と順序付け—「方法の第2部」の標的—

第3章：本質と定義—スピノザの定義論—

1) 『改善論』定義論の理論的困難と確固永遠たるものの問題

1-1) 『改善論』の定義論(2)：その理論的困難

1-2) 確固永遠たるもの[*res fixa et aeterna*]

2) 『エチカ』冒頭における定義の問題

問題の所在

1) 「書簡9」

2) 実体の定義とその本質：定義の機能

3) 実体の定義とその実在：真理性との連関

第4章：Ratio seu Causa：スピノザ形而上学の展開

1) 問題の所在：デカルトにおける *causa sive ratio*

2) スピノザにおける原因と理由

2-1) *Causa sui*

2-2) *Ratio seu Causa*

終章：本質と実在

個別的なものの有限性と実在

個別的なものの永遠性：本質と実在

結論

論文概要

序論は、スピノザ形而上学の生成史的研究の出発点となる分析の対象を定めるべく、彼の初期著作とされる『神、人間、および人間の幸福に関する短論文』（以下『短論文』）と『知性改善論』（以下『改善論』）が孕むテキスト成立上の問題を検討する。従来の研究では、『短論文』が先に成立し『改善論』がその後に執筆されたとされてきたが、1980年前後から F. Mignini の一連の研究により、これら両作品の成立順序を逆転させる仮説が提起さ

れた。この Mignini の研究が提示する諸論点を検討した上で本序論は、両作品の成立時期ならびに順序の確定がなおも困難な問題として残ることを示す。加えて、現在私たちが手にしている『短論文』のテキストがスピノザ本人によって書かれたものとは断定できない点をも考慮すると、未完のままに残されたとはいえ、彼自身によって書かれた『改善論』にスピノザ形而上学の生成に関わる考察の出発点を定めるべきであると結論付ける。

第 1 章は、まず『改善論』冒頭の議論を分析することで、スピノザ形而上学の根本的なモチーフが、個別的なものの[res]である人間の生についての探求にあるという点を浮き彫りにする。スピノザは快や名誉といった一過的なものではない不変で確実なもの、とりわけ確実な認識を得ようとする。そこで本章は次に、同論考における「確実性」概念を分析する。その結果、確実性は認識の対象の本質をあるがままに捉える点にあることが示される。しかしスピノザは『改善論』でいかにして対象の本質認識が可能となるのかを論じ切れておらず、確実性は未決の問題として残ると主張される。

第 2 章は前章でみた問題を『改善論』の議論が抱えるより一般的な問題の中に位置付けることで、スピノザ形而上学が答えようとした課題を明確化する。その一般的な問題とは、個別的なものの本質と実在の問題である。スピノザは抽象的・普遍的認識に依ることなく、具体的・個別的なものの本質と実在の両者をあくまでその個別性において統一的に探究しようとする。だが同論考の本質と実在をめぐる議論は次のような問題点を有する。即ち、一方で個別的なものの実在は、実在しないこともありえた偶然的実在であるのに対し、他方でその本質は幾何学的本質のように必然的な永遠真理とみなされる。本章は、これら両者がいかにして統一的に把握されるのかを同論考は説得的に示していないと結論付ける。

第 3 章は、前章でみた本質と実在の統一的把握のための議論の方向性を見定めた上で、この問題がいかにして解決されることになるのかを念頭におきつつ『エチカ』の形而上学解釈へと進む。『改善論』終盤でスピノザは、個別的なものの実在と本質がともに「全自然の源泉」(神)から産出されること、個別的なものがその一部として属する自然全体をその第一原因から認識すること、この二つの論点を素描している。本章前半はこれらの論点が『エチカ』解釈の鍵になることを示す。次に本章後半は『エチカ』冒頭部を分析する。とりわけ『エチカ』の出発点をなす定義の機能と、自然全体と等置される実体＝神の実在証明を分析の中心とする。以上を通して、『エチカ』冒頭部が目指しているのは、自然全体と等置される実体＝神の本質に実在が含まれることを、定義を出発点とした一連の論証を介して、「それ以外ではありえない(そうでないことが考えられない)」という必然性の下で確立することであるという点が示される。

第 4 章は、前章で論じられた実体＝神が、いかにして原因として作用するかを検討することで、『エチカ』におけるスピノザ形而上学の展開を跡付ける。本章で重視されるのは「力」の概念である。前章が示したように、実体＝神の本質には必然的に実在することが含まれる。そうであれば実体＝神が実在しないことは不可能であり、それは常に必然的に実在する。さらに本章では実在することが「力」として捉えられ、この力がまた原因として結果

を産出する力でもあることが明らかにされる。以上二点より、実体＝神は原因として必然的に結果を産出する力を有することになる。加えて本質と実在が切り離されえず、また産出力を有する実体＝神は、個別的なものを含めたすべてのものの本質と実在と力三者の原因となる点が明確にされ、個別的なものの本質と実在を統一的に捉えるという『改善論』以来の課題が果たされることになることと結論付けられる。

終章は、個別的なものである人間の本質と実在の包括的把握が、いかにして人間の生の探求に関わるのかを示す。これを通して、第 1 章で提示されたスピノザ形而上学の根本的なものくろみがどのように実現されるのかが論じられる。第 4 章が示したように、すべてのものの原因である実体＝神から、個別的なものの本質と実在と力が必然的に産出される。実体＝神の本質が実在を含む一方で、個別的なものの本質は実在を含まず、この点で後者の実在は前者からの産出に依存する。しかし実体＝神はまた個別的なものの力の原因でもあった。この力によって個別的なものは自らの実在を継続することが可能となり、相対的な自立性を獲得する。本章はこの個別的なものの実在の継続が人間の生に他ならないと結論付ける。以上の考察を通して、個別的なものの必然的産出をその原因から出発して認識することが、当のものの生を「それ以外ではありえない」という必然性の下で肯定することであり、スピノザ形而上学の本領はこの点にあるとする本論文全体の結論が示される。

審査概要

本論文は、統一的な解釈の難しい『エチカ』を丹念に読み解き、読者を生の肯定へと導くというこの著作全体の狙いを説得的に再構成することを目指した水準の高い労作と行うことができる。本論文の扱っている問題、即ち、スピノザ思想形成史において『改善論』をどう位置付けるか、『エチカ』の出発点となる「定義」をどう理解すべきか、また『エチカ』の用いる「原因性」概念をどう解釈するかといった問題に関しては、国内外に膨大な先行研究が存在する。本論文はこれらの研究史を渉猟し、いくつかの点でこれまでの研究を前進させている。その中でもとりわけ注目すべき論点は以下のものである。

第一に、近世スコラ哲学とスピノザ哲学との新たな観点からの対照である。この点に関しては次の二点が重要である。1) 20 世紀フランスの哲学史研究の大家 M. Gueroult による研究以降、スピノザが近世スコラの原因性の議論に独自の修正を加えた上で自らの体系に取り入れているという解釈が提示され、この点で近世スコラとの距離や断絶面が強調される研究動向が支配的だった。しかし本論文はいまだ十分な研究がなされているとは言えない近世スコラのテキスト（ブルヘルスダイク Franck Pieterszoon Burgersdijk, 1590-1635, *Institutionum Logicarum* 『論理学教程』、ヘーレボールド Adriaan Heereboord, 1614-61, *Meletemata Philosophica* 『哲学研究』）を再検討し、近世スコラの内部でもアリストテレス由来の原因分類の組み換えがみられることを指摘している。つまり、結果の本質と関係することのなかった「作用因」が、本質に関わる原因として再規定された点である。2) 『改善論』における定義論の狙い、つまり被定義項の個別性を担保するという論点の革新性を

明示するために、これまであまり顧みられることのなかった近世スコラの定義論を検討し、比較対象としている。その結果、近世スコラでの定義は多数の個別的なものに共通する類的な本質を説明するものであったのに対して、スピノザの定義論が個別的なものの個別性を捉えようとするものであるという対照が明示された。

第二に、本論は『エチカ』全体の解釈の鍵ともなる同書冒頭に置かれた定義の解釈に関して、従来の研究で支配的であった『改善論』で提示される定義論を基に解釈する動向の問題点を指摘している。『改善論』を基に『エチカ』の定義解釈を行なっている研究は膨大にある中、本論はこれらの研究を渉猟した上で、そもそも『改善論』の定義論が論理的な循環を含んでいることを指摘し、この議論に全面的に依存しない解釈を打ち出している。

第三に、本論は 20 世紀フランスを中心とするスピノザ研究の飛躍的進展を正当に視野に収めている。この動向の中でもとりわけ注目すべき、スピノザ哲学を 1)力の形而上学、2)生の哲学の観点から読解するという方向を採用し、『エチカ』のテキストに忠実な分析を加えた上で原因性の議論に関する独自の解釈を提示することによって、本論はこの方向性を進展させている。これまでの原因性解釈では、個別的なものの本質と実在それぞれの原因が別物として理解されていた。しかし本論の解釈によれば、力概念を介在させることで両者が統一的に理解される。この原因性解釈によって、個別的なものの本質・実在・力の連関が、当のものの生の肯定に結びつくという理路を提示することが可能となった。

上記のように本論文は、その手法、着眼点、成果において高い学術的価値を有する論文となっているが、いくつかの点において今後の課題を指摘することができる。

第一に、スピノザ哲学の生成史研究の出発点を、テキスト成立事情に起因する問題によって『改善論』に定めたわけだが、こうした成立事情を考慮の外に置いた時、スピノザ哲学の内実の生成史を十分に描くためには『短論文』への目配りも必要となる。第二に、スピノザ哲学を力の形而上学の観点から読解し、さらに個別性の重要性に着目した点は評価されるが、こうした観点の下でいかに個別性を語るのかという点に関して、力の「度合い」という概念を導入した独特な解釈を提示している G. Deleuze の議論にいかに応じるか、これは秋保君の今後の研究に残された課題である。第三に、『改善論』の議論全体の評価に関して、同論考が理論的な困難を含むものではないとし、本論文の評価と対立する解釈を打ち出している A. Matheron の解釈に対する応答をより詳細に検討する必要がある。第四に、神の本質の内にその実在が含まれることを定義を通して論証しようとする『エチカ』の議論が、「存在（実在）はものの内実に関わる（レアルな）述語ではない」とするカント以降の批判に耐えうるものであるかについての慎重な吟味が不可欠である。この吟味なくしては、現代におけるスピノザ哲学の有効性を正確に判定することができないからである。

以上のようないくつかの課題を残しているが、本論文は内外の研究史を踏まえ、既存の研究を進展させることによって、水準の高いスピノザ哲学研究として、また本質・実在・生を主題とする密度の濃い哲学研究として、高い学術的価値を有するものであり、審査員一同は本論が博士（哲学）の学位にふさわしいものであると判断する。